
真剣で私に恋しなさい！ 闇夜に咲く枯れた花

日本政府の犬(仮)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で私に恋しなさい！ 闇夜に咲く枯れた花

【Nコード】

N5400Z

【作者名】

日本政府の犬（仮）

【あらすじ】

悪宇商会直属の揉め事処理屋である星嚙絶弥。世界各国で様々な仕事をした彼は、日本へ戻って最初の任務が舞い込んできた。その内容とは まじこいと紅のクロスオーバーです。紅は設定だけを頂いて、舞台は川神学園です。

登場人物設定

ホシガミ セツヤ
星嚙絶弥

男性 21歳

職業 揉め事処理屋兼悪宇商会社員

身長 182cm (標準)

体重 80? (標準)

髪型 赤毛で短髪

趣味 読書 (面白ければ何でも読む)

特技 何でも食べられる 速読 刃物の扱い

好きなもの カレーなどの庶民的な食べ物 本 家族

嫌いなもの 他人 自己中心的な人物 高級な食べ物 (食べても味の良さがわからない)

裏十三家の一つ、星嚙家の一人。

全身を“星嚙製”の高い技術力をもって作られた超高性能の人工臓器や義手義足に入れ替えており、超人的な戦闘力と耐久性を持つ。

所謂サイボーグいわゆると言う奴だ。“星嚙製”技術力は九鬼家の力を持つとしても再現することは不可能で、計り知れない謎めいた力が宿るサイボーグと言ってもれっきとした人間であり、肉体の危険信号として痛みや苦しみも感じれば、もちろんセックスも妊娠させることもできる。

悪宇商会とは裏社会では最大手の人材派遣会社。裏世界で五本の指に入る程の規模の大組織。戦闘屋、殺し屋、呪い屋、払い屋、逃がし屋、護衛屋など多種多様な人材を揃えており、裏社会での一流の人材が多数所属している。依頼に応じて適した者を送りこみ、報酬を得る。その活動には善悪の区別もポリシーもなく、金次第でどんな犯罪にも加担し、どんな犯罪の解決にも協力する。政治家やマフ

イアに利用されるケースも多い。悪宇商会の構成員は全員が人殺しの経験がある。

その中で絶弥は戦闘屋、殺し屋を担当しており、悪宇商会での実績は上位に食い込む実力者。

マモン キミカ
馬紋喜美香

女性 15歳

職業 絶弥のパートナー兼弟子

身長 151?

体重 70? (大半が義手義足の重さ)

髪型 白髪でショートカット

趣味 料理 裁縫 家事全般

特技 空手

好きなもの 師匠 家族 師匠から貰った義手義足

嫌いなもの 師匠の敵

手足は星嚙製ではなく、裏世界で流通している戦闘用義足と義手を装備。完全に戦闘用の為、外見で義手だと分かるため、仕事以外は長袖のスーツと白い手袋を着用している。絶弥と違い手足だけが機械化されているので、胴体が弱点となる。

絶弥の弟子となって一年は、絶弥の知り合いが師範をしている空手道場で鍛錬に明け暮れた。空手の基本的技はすべてマスターしたが、実戦経験が皆無で、試合以外で戦ったことがない。

その為絶弥の身の回りでお世話しているが、川神学園の決闘システムで実戦を積むように絶弥に言われる。

登場人物設定（後書き）

ども、日本政府の犬（仮）です。

この小説は紅の世界とまじこいの世界が混合した世界です。

ですので、多少世界の設定がおかしい所があります。

自己満足で書く小説ですが、感想お待ちしております。

ではまた次回お会い致しましょう

零話 『長期依頼』

毎度毎度ながら、妹は人使いが荒い。

俺はアメリカ、中国、ドイツと世界中を渡り歩き、依頼を熟して休み暇無く次の仕事を入れるとか鬼だろ。

しかも長期の仕事とか面倒臭い。まあそれなりの報酬を貰えるから問題無いが、正直休みが欲しい。

「なあ喜美香。いつそのことハワイ行きの飛行機に乗って、そのままバカンスに行かないか？」

「バカな事を言わないでください師匠。絶奈さまに怒られますよ」
素っ気ない顔で冗談を冗談だと受け取らないお堅い思考の少女が、着替えなどが入った旅行用スーツケースを轆きながら答える。

白魚のように白い肌に、光を通すと透けて輝く美しい白髪。それとは対照的な黒いスーツを着込んでいるので、白い肌や髪が無駄に強調される。そしてアルビノ特有のルビーのように紅い瞳。

名前は馬紋喜美香。俺の弟子で身近の雑用を任せているパートナーだ。

今回も依頼を執行するにあたって、色々な雑用をさせていた。例えば日本食が恋しくなった俺の為に、事前に持って来た食材で日本食を作ったり、海外のホテルが汚かったので部屋の掃除をさせたり。

海外で一般のビジネスホテルに泊まった人は分かんと思うが、汚いんだ。

部屋全体がカビ臭かったり、前に泊まった人のモノと思われる髪の毛が落ちていたり、壁に穴が開いていたり、布団に穴が開いていたりと最悪の環境だ。絶奈の奴、もっと高級なホテルを用意してくれ。今度からは実費で良いトコ泊まろう。

「……はあ」

「師匠どうかしました？」

「毎日毎日絶奈からの仕事で疲れているんだ。それくらい察してくれ」

「それは失礼しました。どうぞこちらへ」

見れば喜美香はうさぎ跳びの姿勢で俺に背中を向ける。どうやら背中に乗ってくれと言ってたんだろ。

「師匠、早くしてください。もうすぐでお迎えの車が来ます」

「おいおい……少しは考えろよ。女の子におんぶされる男なんてみっともないだろ」

「それもそうですね。ではどうしますか」

「いや、自分の足で歩くよ」

まったく、やはりこいつは常識が多少欠落してんな。常識くらいは

教えなきゃならんな。これも師匠の役目。こいつの保護者代わりにある俺の役目。

なんでこいつを引き取ったかなあ。

思えば俺が喜美香を育てる義務も弟子にする理由もなかったはずなのに、いつの間にか弟子になって、俺の身の回りを世話をする家政婦的存在へとなっていた。

あの依頼が無ければ、こいつは死んでいたからな。

「喜美香、次の仕事はなんだ？ 長期以外何も聞いて無いんだが」

まあ面倒だから半分聞き流したんだけど。

「はい。次の仕事は長期で最大一年、最短二ヶ月の期間、マロードと呼ばれる本名不詳の人物の命令に期間内ずっと従います。そして今回は潜入任務です。師匠は神奈川県の川神市に存在する川神学園の二年生として転入します」

「マジかよ……21歳で再び高校生になるなんて予想も出来なかったぜ」

「ついでに私も一年生として転入します」

喜美香が勉強出来るか心配だ。二年前に十三歳で俺の弟子になって以来勉強なんてしてないだろうし。俺も頭良くないから勉強面が心配だ。

「何が嬉しくて学園生活を再びしなきゃならんだ」

「師匠は嫌ですか？」

「勿論。大体こつち世界で生きる俺達に、学校の勉強なんか微塵も必要ないんだ。最低限の表世界のマナーを知っていれば十分」

「私は楽しみですよ。学園生活」

そりゃまた意外だ。こいつの事だから任務としてしようがないとか言いそうなのに、楽しそうか。

「だって師匠と一緒に学園生活を送るなんて、今後の生涯では味わえませんかから」

可愛い奴。

俺と一緒に楽しむ、か。ならもつと嬉しそうな顔をしろ。この鉄仮面め。

まだまだ子供だと思っていたが、やっぱり子供だ。無邪気で純粹な心を持つ喜美香らしいと言えばらしいな。

だが良い機会だ。ここいらで喜美香を表社会の常識に触れさせるのも悪くない。

そう思いながら迎えの黒いリムジンに乗り込み、悪宇商会の本拠地で妹の壻むくねである本社へ向かった。

零話 『長期依頼』（後書き）

どもども。日本政府の犬、略してマツポとでも呼んでくれても構わない日本政府の犬（仮）です

最初に言っておきます。オリキャラの馬紋喜美香はメインヒロインではありません。メインヒロインはまじこい原作から決める予定です。

なのでバンバンどんな原作メインヒロインが良いのか書き込んでください。

ではまた次回の更新時にお会いしましょう。 Bye Bye！

巻話 『九鬼家の家来』

午前中に川神学園の編入手続きを終え、俺は本屋で立ち読みを五時間ぶつ通した後に晩御飯を食べようと繁華街を歩いていると、アイツがいた。

アイツを面白半分で尾行すると、丁度良く人気の無い裏道へと入った。

俺に気付いたからか、もしくは裏道の先に用事があるかは知らないが好都合。接触してみるか。

俺は道を先回りして偶然を装う設定で接触しよう。

「よう、偶然だな」

「ッ！ 何故貴方がここに!？」

「何故つて、見た通りだろ静初^{シンチュウ}。21歳で再び青春を謳歌しに来たぜ。しかし裏世界から足を洗ったと聞いていたが、まさか九鬼家のメイドなんて。お似合いだぜ」

俺は身に纏^{まと}った川神学園の制服を手を広げて披露する。

九鬼家の従者部隊のみが着用を許されるメイド服で身を包み、鋭い目つきの所為^{せい}でとても従順なメイドに見えない中国人の女性の名は李静初^{リーシンチュウ}。数年前裏世界から突然消えた顔見知りだ。

悪宇商会程ではないがソコソコの組織に属していた暗殺者。暗殺専

門の殺し屋で、暗殺の実績を見れば悪宇商会に引けを取らないが、真正面からの戦闘は苦手だったはず。

「……理解しました。私を尾行していたのは、まず九鬼家の側近を一人一人葬り去る算段ですね」

あ、尾行していたのが普通にバレてたんだ。流石元暗殺者、簡単な尾行は直ぐにバレるな。

「おいおい。無駄な勘違いをするな。確かに依頼で川神学園に入っただが、それだけだ。まだ誰を殺す予定は無い。ま、依頼されたら殺すけど」

静初はマジシャンのごとく突如右手に鏢つばの無い日本刀、左手にはクナイが数本など多数の暗器を取り出した。

流石は裏世界でも屈指の暗器使い。俺が気付かぬ間に武器を装備するとは、腕は落ちてないな。いや、むしろ腕が上がっている。

「っーかお前丸くなったな。昔は誰も信じないで、組織の任務だけに心血を注いでいたのに、九鬼家に飼いならされたのかぁ？」

「黙りなさい。正直に答えなさい。貴方は何で私を尾行して接触をはか図ったのですか？」

スツと日本刀を俺の喉に軽く押し当てる静初。だがこれでは俺を殺せない。

「ちよつとした好奇心だよ。それにお前、こんなチャチな刀では、武装した俺を殺す事どころか傷を負わす事も出来ないぞ？ 時間と

武器の無駄だ。幾ら俺が武装してないからって、舐めてんのか？」

「舐めてはいません。客観的に見れば私の勝率は0です。ですがここで引いては九鬼家執事部隊の名に恥じます」

変わったな。良い意味で。何かの為に闘えるなんて、お前が羨ましいよ。

「ここで闘っても良いが、俺にも予定つつーもんがあるんだよ」

「それなら早く、この川神市で何をするのか白状をしてください」

「昔っからの付き合いなんだからわかるだろ？ 依頼内容は決して誰にも漏らさず迅速に仕事を遂行すいこうするのが悪宇商会の絶対的条件。

例えお前に関係ない依頼でも、他言無用。だから話す道理も理由も無

ターンツ。

俺の脳天に一発の銃弾が命中した音だ。しかしその銃弾は被弾した瞬間には、別の方向へ跳弾した。

「……ってえな。ちつとは落ち着こうぜ、静初のお仲間さん。本当に俺は争う気はねえよ」

「……何度か話で聞きましたが、本当に全身が機械なのですね」

その通り。生半可な銃火器では俺を倒せないが、今の俺では二人相手はキツイな。静初の判断が速い。尾行時には既に呼んでいたのか？

『ファック！　なんて奴だよ。確実に脳天に命中したつてのに！』

10階建てのビルの屋上に金髪のメイド服を着用してライフルを所持した外人がいた。アイツはステイシーか。『血塗れのステイシー』ちまみといやあ備兵で数多くの戦場と修羅場を潜くぐった実力者が、今や九鬼家の従者かよ。測り知れないな、九鬼家の戦力は。

「アイツ胸でええな」

中々の大きさだ。あれくらいの乳に顔を埋もれてたいな。つかヤリたい。あの胸で色々な事を。

「良くそんな無駄口が叩けますね。状況を読めないんですか？　既に九鬼家の者がここいら一帯を包囲し始めていますよ」

「え〜。俺まだ何もしてないはずだけど？」

「そうせざる終えませんか。貴方の場合」

「過大評価ありがとうございます」

「それは皮肉ですか？」

「当たり前。俺をこの程度で抑えられると思うか？　どうせなら序列零位のヒュームを連れて来い」

「さらつとそんな事を嘘でも言える貴方が怖いです」

「嘘は言って無いぜ？　お前程度なら逃げるくらいはお茶の子さいさいだ」

はあ、と静初は溜息を吐き、呆れかえった。多少俺への殺意が消え去った。

おっと。静初との雑談を楽しんでいる暇は無さそうだ。10……いや23人に囲まれてるな。ここで戦闘してもデメリットしか残らない。どうにかして穩便に済まさないと。

依頼の前に街で暴れたり、九鬼家に喧嘩を売るなんざ、デメリットだ。それに九鬼家に喧嘩を売ったと妹の耳に届いたら処刑される。

「まあ話し合おう。どうすれば俺を自由にしてくれる？」

「……」

『てめえが正直にこの街で何をやるのか喋ればいいんだよ!!』

「だからさ、さっきから言ってるように、依頼内容を他人に言うほど俺はバカじゃねえって」

「……わかりました。今回は見逃しましょう。しかし、貴方がこの街に来たことは九鬼家に報告します」

『おい李！ なに言ってんだよ!? こいつを見逃して、英雄様にもしもの事があつたらどうするんだよ?!』

静初はまたしてもマジシャンのごとく瞬時に隠した。隠し芸に困らない特技で羨ましいこと。

「静初は話が早くて助かる。また今度な」

『てめえも動くんじゃねえ!!』

「ステイシー、少し落ち着きなさい」

『落ち着いてられるか!! こいつは私や李とは次元が違う、百代レヴェルの戦闘マシーンで殺人兵器だぞ!!』

ステイシーは両手に機関銃を持ち、俺に標準を合わせる。

『どけ李!! どかねえならお前ごとぶっ殺してやる!!』

「だから落ち着けと言っているのです」

静初は味方に、清々しいほどの真っ直ぐとした殺気で動きを制止させる。

「ステイシー、貴方の武器では星嚙に勝てません。勿論私のもでもならばここは一旦身を引いて、英雄様の護衛の強化と、今後の対策を練るべきです。ここで無理に戦って、全滅しては意味がありません」

『…… つく、わかったよ。確かにお前の言う通りだ。一番殺傷力のあるライフルで掠り傷も負わせられない相手は初めてだ。一時撤退するよ』

ステイシーは撤退宣言してものの数秒で俺が探知できない距離まで離れて行った。それに連れられ困んでいた奴らも気配を消した。

静初は全員持ち場を離れたことを確認して、俺との雑談を再開した。

「話は変わりますが、用事とは？」

「ん？ ああ、これから弟子と一緒に外食さ。こっちに引越して何も食材も買ってないし、面倒だからファミレスだ」

「貴方も変わりましたね」

静初はフツと軽く口の端を上げて笑った。何だかバカにされたみたいで不愉快だな。

「『孤人戦艦』こじんせんかんなんて仰々しい二つ名を返還したらどうです？ 前の貴方も私と同じく、自分以外の人をゴミのように扱っていたのに、まさか弟子を取るなんて」

「変わってねえよ。今も他人はゴミ以下だよ。単に弟子の奴が他人じゃなくなったただけだ」

そう。俺は静初とは違って何も変わっていない。

元々他人しかいない世の中に、たった一人大切な人を見つけただけだ。こいつの為になら何でもやってやるって奴を。

多分この感情は恋愛では無く、家族みたいな感覚だ。例えば可愛い妹が出来たみたいだな。……絶奈は義理の妹だから全然守りたいなんて感情は皆無だ。

「そうですね。でも良かったではありませんか。他人以外の人と出会えて」

「ありがとよ。そっぴやお前、肉まんの匂いがするぞ。太んなよ」
そう言うと、静初は顔を真っ赤にして俺のケツに蹴りをかました。
ジョークなのに……。

巻話 『九鬼家の家来』（後書き）

コンバトラー。いつも皆の心の隅でウジウジしているマッポです。突然ですが、この作品、真剣で私に恋しなさい！ 闇夜に咲く枯れた花の正ヒロインを取り敢えず一人だけ投票で決めようと思います。

決定方法は、感想に書かれた希望するヒロインで一番多いヒロインにします。

現在1位は百代です。皆様の投票をお待ちしております

式話 『喜美香と宿題』

さて、俺は今回川神学園に年齢を詐称して転入した形となったわけだが、依頼人の意図が分からない。

通常俺みたいな戦闘屋は潜入する事はまず無い。殺したい相手、もしくは壊したい相手を殺すのが仕事で、ほとんど奇襲や特攻で一瞬にして終わるからだ。

戦闘屋を川神学園に入れる目的が不明だ。特に指示も無く、普通の学生生活を満喫しろの一言だけ。妹の絶奈は依頼内容を知らされてゐるらしいが、俺にはその情報は時が来るまで秘密、だと。

ただこのまま依頼も無く過ごすのも退屈だ。ここは一つ喜美香に鍛錬をさせるか。

川神学園には、表世界で武神と呼ばれる『川神百代』かわかみもせよを筆頭に、実力のある武道家が揃う珍しい学校だ。しかも学校の校則の一つに決闘というモノがある。この決闘では生徒同士で合法的に戦うことが出来る。実践経験の無い喜美香にとって、良い鍛錬となるだろう。

「師匠、話とはなんでしようか」

朝食を食べ、食器を洗い終わった喜美香が俺の前に正座している。なんとまあ不思議な格好だな。手足の義肢を隠す為とはゆえ、上半身は普通の女子用制服に、下半身は男性用の制服。更には白い手袋で手を隠す徹底振り。五月とは言えこの格好は暑そうだ。

「うん。今日からお前に宿題を出す」

「宿題、ですか。内容は数学ですか？ それとも現代文ですか？」
「どうやら俺の言葉にピンとこないようだ。本当に思考が硬いな。」

「修業だよ。今までは空手だけの地道な鍛錬だったが、今回の修業は実践だ」

「はい」

「ちよいちよいちよい！！ 何故服を脱いでいる！！」

いきなり制服を脱ぎだした喜美香をすかさず停止させ、外したボタンを掛け直させる。

「？ 実践とは男女の交わりの事ではないのですか？」

「おま、そんな嘘情報をどこで……」

心当たりが一つある。間違いなく、アイツが情報源だ。

一年間空手道場で直接面倒を見させ、その道場の師範武藤環^{むつむぎ}。俺の昔馴染みだ。

「喜美香、実践と言うのは、今まで教えられたことを、実際にする事なんだ」

「はい。男性器の扱い方は、環先生から教わりました。それをするのではないのですか？」

よし。今度アイツに会ったら一発殴ろう。俺の弟子を変態に育てやがってありがとって。

「……他にも教わった事があるだろ？ 空手とか護身術とか色々さあ」

「ああ、そちらの実践でしたか。失礼しました」

喜美香は少し頭を下げ謝る。こちらの人選ミスでもあるから謝れても正直困る。

「話を戻そう。今回の修業は川神学園の決闘システムを利用する。川神学園には沢山の武道家の家系が多いからな。取り敢えず1年生を制圧を目標に頑張れ」

2-F。俺が在籍するクラスだ。

話によれば各学年の問題児を一纏ひとめにしたクラスだ。

転入してから早一週間経ったが、未だに俺は一人で過ごしている。別に一人で過ごすのは嫌いでないが、ハブられているみたいで精神的にキツイ。何でも良いから誰かと喋りてえ。

今の俺は所謂いわゆるボッチ。

なので俺は一人寂しく屋上で弁当を食べていた。

喜美香お手製の質素な弁当だ。おかずがウインナー、卵焼き、鮭の

三点のみ。弁当を作らせて約一週間変わらない中身にバリエーションが欲しいと思う今日この頃。アイツは言えばやるけど、言わなきゃやらの大きな欠点だ。今日あたりに弁当のレピシ本を買って行くか。

なんて考えていると、屋上に設置されているスピーカーから女生徒の声が響き渡った。

「ただいま只今より第1グラウンドで、決闘が行われます。内容は武器有りの戦闘。対戦者は1-S武蔵小杉と1-C馬紋喜美香。見学者は第1グラウンドまで足をお運びください。繰り返しお伝え」

流石言えばやる我が弟子。早速実質1年トップの武蔵に決闘を挑んだか。

実は川神学園の生徒をリサーチ済みで、顔と名前は大方憶えている。

武蔵小杉は放送の通り1-S組の文武共に学年トップの実力者。入学してから今日まで一年の実力者と思われる生徒に決闘を吹っ掛けていた。そして全勝。一年トップだ。

だが他に一年の隠れトップの少女がいる。その名は

「よいしょっと。ふう。やっぱり美少女を探すには、上からが一番良いな」

突如屋上へ現れた一人の女性が俺の隣で下の観客たちを見下ろす。

……俺の目にはジャンプして屋上に見えたような。

「ん？ なんだお前は」

思い出した。こいつは川神家の末裔、川神百代だ。戦闘狂で破壊狂の異常者。一概に言えば俺達と同類の表世界の住人。

意味不明で理解不能な戦闘力は裏世界でも有名で、近いうちに川神院を飛び出して裏に来るとの噂もある。

「2-Fに転校してきた星嚙絶弥です」

「あーお前か。裏十三家の一人つてのは」

やはり川神院の関係者には俺の正体が知られているか。厄介だな。今後仕事をするうえで。ただでさえ九鬼家に監視されているのに。

「裏十三家とか全然知らんが、お前は強いのか？」

「……え、裏十三家について知らないんですか？」

「うん。全然」とあっけらかんと答える百代に、俺は少し呆れた。

「その、裏十三家つてのはなんなんだ？ 爺さんにはお前が裏十三家の一人で、相手にはするなと言われたんだが」

ここは正直に裏十三家については説明をするか。どうせ調べれば分かる情報だ。

「近現代までこの国の裏世界の頂点に君臨していた十三の家系のことですよ。俺は其中で星嚙家の一族の端くれです」

「ふーん」と興味無さそうな表情で、下で闘っている喜美香の試合

を見ている。

俺も百代の隣で下の試合を見る。試合は喜美香の劣性。弓矢で武装する武蔵を相手に遠距離から攻められて近寄れずにいる。

しかし武蔵が武装している弓の残量もあと僅か。このまま粘れば勝機は見いだせるだろう。

「あそこのお前と同じ時期に転校してきた少女も、その裏十三家の一人か？ あの動き、素人では無いな」

「知りません」と百代の質問を一蹴する。

「しらばっくれんなよ。どうせあの子もお前の仲間なんだろう？」

「あ、……ぐっ！ 首を絞めるなっ」

百代は俺の首にチョークスリーパーをかけて尋問する。意外に力が強い。少し力を入れただけでは腕が離れそうにない。

ん？ この後頭部の柔らかいマシユマ口みたいな感触は……乳か！！

くっ、これが百代の必殺技『天国と地獄』か。首を絞められ苦しんでもがく所に、でかい胸の感触を相手に伝え天国を見させ、もがく力を半減させる恐ろしい技！！俺のような童貞には効果絶大だ！！！！

「なら話せよ。あの可愛い子ちゃんを紹介しろ」

そっちかよ！！ レズビアンだって話本当だったのか！！

「んなの正面から堂々とナンパでもしてる！」

そういうと、百代は「うーん。それもそうだな」と俺の首から手を放して、落下防止の金網の上に飛び移った。

「じゃ、またな」と言い残し、そのまま屋上から身を投じた。

一見すると自殺と思われる行動だが、百代はすんなりと着地して、何時の間にか試合を終えていた勝者の喜美香の元へナンパしに行った。……百代に毒されて道を踏み外すなよ、喜美香。

参話 『決闘』

師匠から久しぶりの修業を言い渡されました。

今まで環先生から空手や護身術を習っていましたが、ようやく実践的な鍛錬だ。

この鍛錬を重ねれば、きっと師匠の隣で闘える日も近くなる。

そして恩返しをしたい。

私に生きる為の道を造ってくれたこと、

そして、生きる為の足を、手を貰った事を、

私は一生掛けて恩返しをする。

「あら。あなたは確か転校生の……」

「1-Cの馬紋喜美香です。以後お見知りおきを」

私は師匠から言い渡された修業を遂行すべく、「一年の強者は誰か」と訪ね歩くと、1-Sに在籍する武蔵小杉さんに行き当たりました。

肉体を使った決闘は、職員会で了承を得ないとならないので、朝のHRが始まる前に決闘を申し込みに行った。

「あ、そう。それで、プレミアムな私に何の御用かしら？」

「決闘を申し込みに来ました」

私は懐から龍の絵が描かれた川神学園のワッペンを取り出す。

「内容は武器有りの戦闘です」

武蔵さんは私の身体の隅々を舐めまわすように上から下を観察して鼻で笑った。

「私に挑戦するなんて、命知らずの馬鹿なのね。しかも覇気を感じない。私が誰だかわかって行ってるの？」

何を至極当たり前の質問をするのだろう。知っているから決闘を申し込みに来たのを、武蔵さんは察しないのだろうか？

「しってます。一年では強いのですよね？」

「その一年では、つてのは気に食わないけど、その通りよ。あなたは、一年では負け知らずの私を相手にしようというの？」

胸を張って声高々と上から目線で私を見下す。

「御託ごたたくはいいので、早くしてください。朝のHRに間に合わなくなります。それに、そんな風に言っただけで負けた時に格好悪いのは貴方ですよ」

武蔵さんは両頬をピクピクと痙攣させて苦笑い。そして真剣な顔つ

きへと変化した

「……良いわ、あなたの事を徹底的に潰してあげる」

『弁当いかがつすか〜。料理部手作りの昼飯はいかがつすか〜』

『さあ張った張った！今の所優勢は武蔵小杉！大穴狙うなら謎の転校生、馬紋喜美香だ！！』

『飲み物もどうですか〜。バツチリ冷えてますよ〜』

昼休み。

担任の先生に促されて第一グラウンドへ出ると、そこには全生徒が集まったのではないかという人で溢れかえっていた。ちょっとしたお祭り騒ぎだ。

グラウンドの中央には川神学園の学長、川神鉄心学長と対戦相手の武蔵さんが待っていた。

武蔵さんはブルマ 姿に弓矢を武装した簡単な武装だ。

「やっと来たのね。あまりにも遅くて逃げ出したのかと思ったわ」

遅れた理由はあるけど、ちょっと言えない。義肢のリミッターを少し外すためにトイレに籠っていた。

「すみません。少し用事がありました」

「あら、あなた手ぶらじゃない。まさか武器無しで私に挑むの？」

「はい。私は剣術や弓などの武術は極めていませんので」

しかし私の腕や足が武蔵さんの弓矢の代わりであるので、完全に武器が無いと云う訳ではありません。

役者が揃ったと言わんばかりに、観客は沸き始めた。ここまで大勢の人に囲まれたのは始めてだ。

「これより川神学園伝統、決闘の義を執り行う！」

『やっと始まるぜ！！』

『いいぞー！ やれやれー！ー！！』

『武蔵ー！ テメエに賭けたんだから、負けたら承知しねえぞー！！』

野次罵倒声援が入り混じり、外野のテンションが最高潮に達していた。

「両者、前へ出て名乗りを上げるがよい」

鉄心学長の合図の元、私と武蔵さんは前に出た。

「1年C組 馬紋喜美香」

『頑張れ転校セー！！』 『期待してつぞ新入り！！』 『あれ？ 転校生って男だっけ？』 『バカ、あの子は男装した立派な女子だよ！』 『男は2年に転校してきたゼツヤとかいう名前の奴だよ』

いえ、私は別に男装している訳では無いのですが……。

「1年S組 武蔵小杉」

『何度も言うが、テメエに全財産掛けたんだぞっ!!』 『最近調子に乗ってんじゃねーぞ! ここらで一回負ける!!』

「ワシが立ち会いのもと、決闘を許可する。勝負がつくまでは、何があっても止めぬ。が、勝負がついたにもかかわらず攻撃を行おうとしたらワシが介入させてもらう、良いな?」

「承知しました」

「プレミアムに承ったわ!」

今疑問に思ったのですが、何故武蔵さんは『プレミアム』が口癖なのでしょう。全くもって理解不能です。

「いざ尋常に」

私と武蔵さんはそれぞれ構えを取る。

「はじめいつ!?!?!」

武蔵さんはまず初めに武装していた弓で、私に向けて矢を放った。

すかさず私は紙一重にかわして距離を取るが、これが失敗だった。

半端に距離を取ったせいで、遠距離から攻撃を仕掛ける武蔵さんに真面に近づけない。

「ふふん。どう、私の腕前。弓道部でも3年生を比べても引けを取らないのよ」

武蔵さんの戯言は置いといて、まずは相手の意図を探ろう。

こうして武蔵さんが軽口を叩きながらも、弓を惜しげも無く射っている。そこから導き出される答えは、弾切れを恐れていない。

弾が切れても何か秘策があるはず。

「ほらほらほら!! 避けているだけでは勝てないわよ!!」

……見たところ残り十数本といった所だ。本当に球切れを恐れていない。

ならば秘策が出る前に、こちらから攻める。

私と武蔵さんの最短距離、真っ直ぐ向かって往く。

「貰ったわ!!」

先程まで射られた矢の中で一番速い弓が飛んで来た。狙いは私の喉のど。躑躅無く狙った。

これは避ける暇は無い。ならば防ぐのみ。

カンツ。と右腕が鳴った。咄嗟に防いだ義肢の金属音が観客と武蔵さんの耳に届く。

「なっ！ まさか右手に籠手を装備してたの!?」

ならばと今度は三本の弓を取り出して、また狙いを定める。

三本速射した矢は、両足の腿、鳩尾にそれぞれ向かって進む。

私は鳩尾の矢だけ防いで、両足に放たれた矢は無視して走り続ける。

三本の矢はそれぞれ跳ね返り、またしても金属音を轟かせた。

「そんな！ 足にも武装をしていたというの?!」

やっと私の間合いに武蔵さんが入った。

「こうなったら私も本気を出すわ!!」

ならば最初から出せばいいのに。そんなに勿体着けずに。

「せいや!!」

武蔵さんは弓矢を捨て、右ストレートを繰り出した。だが矢ほどの速さも無い拳を私は難無く避け、武蔵さんの後ろに回り込む。

「ここっ!!」と裏拳で続けて攻撃するが、それはバックステップでかわして力を溜める。

「それが貴方の実力ですか。なら、私が本当の拳の使い方を教えてあげます」

足の踏ん張る力を腰に、更にそれを肩、最終的に拳の先までに伝え

る。そして極めつけは全体重も拳に乗せる。

「『正しい拳』と書いて」

咄嗟めいごの判断で武蔵さんは身を固めて防御の姿勢を取る。

「『正拳』!!」

ゴニヤ。

殴りなれている木とは違う、コンクリートとは違う、金属とは違う
感触が私の神経を走り回る。

肉だ。人間の肉を殴った感触だ。

「ぐはっ」

武蔵さんは口から血反吐を吐く。その血反吐が私の制服を赤く染めた。

武蔵さんのお腹に減り込んだ拳を、そつと抜くと崩れ落ちるように
その場に倒れ込んだ。

勝った。勝ったんだ。

周りから聞こえる観客の歓声が聞こえる。だけど素直に喜べない。

人を殴るのが気持ち悪い。

初めてだ。師匠以外の人を殴ったのも、人を倒したのも。

拳から伝わったあの肉の感触が気持ち悪い。

師匠はこんな事を普通にやってのけているのか。すごいなあ。こんな気持ち悪い事を普通にやるなんて。

私はこれに慣れなければならない。

師匠に並び立つためには、慣れなくては。

参話 『決闘』（後書き）

ども……彼女いない歴〃年齢の政府の犬です……
クリスマス夜の俺は何をしているんだ……彼女が欲しい……
皆も俺みたいに男子校はいらぬ方がいい。彼女なんて絶対できない。
幼馴染がいたり中学の女友達がいないと、絶対できない。
来年こそは絶対彼女を作つてやる！！

あ、ついでにヒロイン投票期間は12月30日までになります。
それまでに感想の方に投票お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5400z/>

真剣で私に恋しなさい！ 闇夜に咲く枯れた花

2011年12月25日01時52分発行